

「よ、よろしく願います…っ」

「ふふ、うん。よろしく願います」

顔が熱い。なんとなく緊張して早口になってしまふ。言いながら頭を下げた私を見て、目の前に立つ暁（あきら）くんがくすくすと笑った。それで余計に顔が熱くなっていく。

今日は、幼馴染でお兄ちゃんみたいな存在の暁くんのお願いで、彼が個人経営しているエステサロンに来ていた。どうやらこれから新メニューとして出したいマッサージがあるらしく、それを受けて感想を教えてほしいとのこと。たまにバイトで暁くんのお店を手伝うこともあるので、私はそれを二つ返事で了承した。

（だって……暁くんのお願いだもん……）

頭を上げた私がちらりと暁くんを見上げると、そのかっこいい顔にドキドキしてしまう。

すぐに顔を逸らしたけど、見ていたの、バレてないかな。大丈夫かな。

私の心配を他所に、暁くんは棚からビニールに包まれた施術着を取ると、それを笑顔で手渡してきた。

「じゃあ千佳（ちか）ちゃん、これに着替えて来てもらえる？」

「うんっ」

暁くんの手から施術着を受け取ると、カーテンのかかった隣の部屋でもらった施術着に着替える。

（……あれ）

暁くんと二人きりなことにちよつと浮かれていて、着替えてから施術着の違和感に気がついた。

この施術着……というか、紙でできたブラとショーツ。ブラはまだしつかりと胸を覆ってくれているけど、ショーツはほとんどTバックだ。前はこんな心許ないのじゃなかったのに…。

「どうかした？」

暁くんの声がカーテンの向こう側から聞こえて、ドキドキしながら振り返る。部屋を仕切るカーテンから顔だけ覗かせて暁くんを見ると、にこにこした暁くんが首を傾げた。

「これ、ちょっと……恥ずかしい、かも……」

笑顔の暁くんを見ちゃうと、まるで私だけ意識してるみたいで恥ずかしい。暁くんは私の言葉に察したような顔を見ると、申し訳なさそうに眉を下げた。

「あ、そっか。言ってなかったよね。オイルマッサージだから普通の施術着だと汚れちゃうんだけど……恥ずかしいよね。ごめんね」

「だ、だいじょうぶ！」

謝った暁くんに、思わず首を横に振る。元はと言えば、確認しなかった私のせいかも。暁くんにそんな顔してほしくなくて、だけどやっぱり恥ずかしくて、胸元を腕で隠しながらカーテンの奥から出た。

暁くんは私がカーテンから出ると、こちらをまじまじと見ていて、その視線に顔から火が出そうになる。

「な、なに……？」

「千佳ちゃん、ちょっと後ろ向ける？」

「えっ……う、うん……」

戸惑いながらも後ろを向く。紙ショーツがTバックのようになっていて、おしりが見えそうなくらいの露出のものだったから、暁くんにおしりを見せているみたいで恥ずかしい。

そわそわしながら待っていると、暁くんの腕が後ろから回ってきて、紙ブラの下のとこに触れた。

「っひ……」

「ごめんね。ねじれちゃってるから、食い込んで痛くなっちゃったらかわいそうだなと思って。後ろからなら見えないから恥ずかしくないでしょ？」

そう言いながら紙ブラを整える暁くんに、なるほど…と口をつぐんだ。ありがたいけど、ちょこちょこ胸に手が当たって恥ずかしいし、なにより後ろから抱きしめられてるみたいな格好にドキドキする。

「ん……」

（変な声出しちゃった…！）

直してくれている最中、紙ブラを少しずらしたことで、紙ブラが胸の先にこすれて小さな声が漏れてしまう。暁くんは直してくれてるだけなのに……！

声が聞こえていないか、そつと後ろに立つ暁くんの顔を盗み見たら、こちらを見た暁くんの目と目が合った。

「ん？ なぁに？ どうしたの？」

「な、なんでもない……！」

（聞こえてない、かな……？ よかった……）

首を振ってもう一度前を向くと、今度こそ声が出ないように口をしっかりと引き結んだ。そのあとも少し整えてもらったあと、暁くんが「はい、おしまい」と言って紙ブラから手を離す。

「あ、ありがとう……」

「どういたしまして。でも千佳ちゃんのこと後ろから抱きしめてるみたいで、ちよつとうれしかったな」

「えっ……」

「ほら、こうやって後ろから腕を回していると、千佳ちゃんがすっぽり納まる」

暁くんの腕が、もう一度後ろから回ってくる。その手がお腹あたりに置かれると、あんまり背の高くない私は暁くんの体に包まれる、みたいな感じになった。

「あ、あの……」

「千佳ちゃんやわらかくていい香り……。肌もちもちすべすべだね」

肌の感触を確かめるみたいにするする撫でる手にドキドキして、身体中が熱くなる。恥ずかしいけど嬉しくもあつてなにも言えないでいると、暁くんの手がショーツの両端の紐に伸ばされた。

「あ、あきらくん……」

「ん？ こっちもねじれてたから、直してあげる」

「じ、自分で……できるから……」

「大丈夫。やってあげるよ」

片方の手はお腹に回されたまま、もう片方の手でショーツの紐のねじれを直していく。最初は紐のねじれを直していた暁くんの手が、足の付け根辺りのクロッチ部分に伸ばされた。

「あの、あの……っ」

「ちゃんと直さないと。ここ、ちょっとだけ触るね？」

「あ、でも、あの……」

「大丈夫。見てないから」

「で、でも……」

持ち上げるためにクロッチ部分を掴んだ指先が、ちょっとだけ内側に入ってきている。ちよつとだけとは言っても、そもそも布面積が少ないのに。

「ひっう………も、いい……」

「よくないでしょ？ 千佳ちゃんのかない肌が赤くなっちゃったら大変だもんね」

「じ、自分で、できるう……」

「できなかつたから、今僕が直してあげてるんだよ？」

ねじれを直すようにショーツを掴んだ指先が、肌に触れるか触れないかの位置で動いていてぞわぞわする。意識したくないのにどうしてもショーツを直す

暁くんの手に意識が集中してしまって、足の付け根の中心が熱を持つようになっていった。

（ど、どうしよう……！）

身を縮こまらせて体を強張らせていないと、ドキドキする心臓の音が暁くん  
に聞こえてしまいそうな気がする。ぎゅっと目を瞑って待っていると、暁くん  
の手を余計に意識してしまって体が溶けてしまいそうだった。

「……ん、はい。これで直ったよ」

「……っへ……」

「ちゃんと大人しく待って千佳ちゃんいい子だね」

にこにこしながらショーツから手を離れた暁くんは、なんだか拍子抜けして  
しまう。そんな私の顔を見た暁くんは、くすくす笑った。

「ふふ。千佳ちゃん顔真っ赤。ドキドキしちゃった？」

「だ、だってえ……」

「かわい。千佳ちゃんの大事なところ、触られちゃうかと思ったもんね？」

「ちっ、ちが……」



「うんうん、それじゃ始めようね？」

からかうようにくすくす笑う暁くんは、私の手を取って施術台まで案内した。完全に暁くんのペースで恥ずかしい。恥ずかしさに赤くなった顔を見られないように顔を俯けながら、大人しく暁くんの手を引かれると、施術台の前に立つ。そのまま仰向けに寝かせられると、目元にタオルがそっと掛けられた。「これから温めたアロマオイルでマッサージしていくから、痛かったりしたら教えてね」

暁くんの言葉に頷く。目を瞑ると、アロマオイルのいい香りがした。肩の辺りから優しくマッサージが始まっていく。最初は恥ずかしいと思ってたけど、気持ちよくて寝ちゃいそう……。うとうとしながら施術を受けていると、だんだんマッサージする手が下に降りてくる。

「……………」

そして、ついそんな声が出てしまった。

鎖骨辺りを押す親指とは別に、かすかに胸の先が刺激される。手のひらを広げていて、その指が当たったのかもしれない。

リラックスしていたこともあって、声が出てしまったことに顔が熱くなる。

「気持ちいい？ もう少し続けよっか」

「……あ……♡」

ぐりぐりと押される親指といっしょに、広げた小指が胸の先端をさわさわ刺激した。いつもよりも薄い生地は、それくらいの刺激でも簡単に拾ってしま  
う。

（どうしよう。暁くんはただマッサージしてくれてるだけなのに、変な気分になっちゃう…♡）

さわさわ……♡

触れるか触れないかくらいのそれに、焦らされているような気分になって、思わず身じろぎする。

「あ、ごめんね。痛かった？」

「ん、んーん！」

「そう？ 痛かったら言ってね」

「うん…っ」

「じゃあ次は、脇のマッサージしようね」

暁くんはそう言うのと、脇へと手を伸ばした。それにちょっとだけ安心……と、ほんのちよつとだけ残念なような気持ちが胸に広がる。

（な、なに考えてるんだろう私……暁くんはマッサージしてくれてるだけなのに……！ 変な格好で、いっぱい触られてるから、なんだかえつちな気持ちになっちゃう……）

今度こそ気にしないように、タオルの下でぎゅっと目を瞑る。

肩の辺りから温かいオイルが垂らされて、体の両側にぴたりと揃えていた腕を少し広げられる。そして暁くんの4本指が円を描くように脇をマッサージする……んだけど。

「……っ……♡」

手のひら全体を肌にあたりつけているから、まるで胸を揉まれているような感覚になる。さっきの刺激でわずかに反応している先端の突起に、手首が押し当てられて熱い息が漏れた。オイルで紙ブラが濡れてしまつて、その分暁くんの手を余計に近く感じる。

「ふふ。硬くなっちゃったね」

「え……？ あっ……♡」

暁くんの小さな声がうまく聞き取れなくて聞き返すけど、骨張った暁くんの手首が硬くなった乳首に刺激を与えて声が漏れてしまう。恥ずかしくて思わず手で口を押さえると、暁くんが優しくその手を外した。

「だめ。声我慢しないで……？」

「あ♡ でも……んう♡ はずかし……あっ♡」

「千佳ちゃんの恥ずかしい声聞きたいな」

「っひ……♡」

暁くんの指が紙ブラの上から勃起した乳首を弾くと、びくりと体が飛び跳ねる。ずっとむずむずしていたところを触ってもらえて、甘い刺激に頭が痺れた。

「あきら、く……ん♡ そこお、マッサー、ジ……あ♡ じゃ、ない……♡」

「マッサージだよ？ しこりがあるから、しっかり解そうね」

「で、でもお……♡ あ♡」

（ずっと触ってほしくてむずむずしてたから、乳首カリカリされるの気持ちいい……♡ これ、マッサージなのかな……？ わかんなくなってきたけど、暁くんがマッサージって言うからそうなのかも……）

濡れた紙ブラの上から乳首をカリカリしたり弾いたり、暁くんの指から与えられる刺激に声が漏れる。濡れた紙ブラは暁くんの指を近くに感じるけど、だんだんそれだけじゃ物足りなくなってきた、足の間をすりすりし始めたときだった。

「これ、もう外しちゃうね」

「あ……♡」

暁くんが紙ブラの端を破って、おっぱいが露わになる。反射的に隠そうと胸に腕を伸ばしたら、暁くんの手が私の手首を掴んで気をつけの体勢に戻した。

「だーめ。千佳ちゃんのかわいいおっぱい、見せて？」

「んう……はず、かし……あっ♡」

カリカリカリ♡

身を振る私の勃起した乳首を、直接爪の先で甘く引っかかれる。

「ふふ。千佳ちゃんの乳首、こんなに硬くなっちゃった……カリカリ気持ちいいね」

「っ……あ……っ♡ それ、だめ……え♡」

「うん、だめだからちゃんと解してあげようね。くにくにしたら治るかな？」

「や……っ♡ あ、ん♡ あ、あ……♡」

くにくにと乳首を摘まれて、形を変えるように弄ばれる。そのたびにびりびりと甘い痺れが襲ってきて、快感に腰が動いてしまう。

動いた拍子に目元のタオルがずり落ちて、暗かった視界が明るくなった。明るくなった視界の先にいた、施術台の隣に立っている暁くんと目が合う。

「あ、ほら。千佳ちゃんが暴れるからタオル落ちちゃった」

「ご、ごめ……、ん♡ あ……ごめっん、なさ……いい♡」

かっこいい顔と目が合って、暁くんはしっかりと服を着ているのに私だけおっぱいを曝け出していて、恥ずかしい声を出していて、反射的に謝ってしま

（うう……暁くんかっこいい……こんなかっこいい人におっぱい見せて、乳首カリカリされて、わたし、気持ちよくなっちゃってる……♡）

「……っ、うう♡ あ、あ……イっ♡ ……っ……♡♡」

そう思ったら今度はびくびくっと体が震えて、頭が真っ白になった。突然訪れた激しい快感に驚いて、はっ、はっ、と犬みたいに息が漏れる。

「なあにそれ……？ 謝ったらイっちゃったの？ それとも……僕の顔見たから？」

快感の余韻が続いたままぼんやりとする頭の上で、暁くんの声が聞こえた。気持ちよすぎてよくわからなくなってきたけれど、暁くんの声が嬉しそうにも聞こえたから、顔を見たくて見上げたときだった。

「ほんと……かわいいね」

「えっ……あっ♡ ああ♡」

暁くんの手が足の付け根に向かって伸びて、紙ショーツの上から突起に優しく触れる。指で優しくすりすり♡ とこすられて、体がびくついてしまう。

「かわいい千佳ちゃんのために、こっちもマッサージしてあげようね」

「っひ♡ あ、だめっ♡ そこ……だめえ♡」

熱くなっていたそこをカリカリッと爪で引っかくように触られるたび、腰がびくびくと動く。さっきよりも強い快感が襲ってきて、体に力が入らなくなっていく。

「あっ♡ ゆびい……とめっ、んっ♡」

「止めてほしいの？ でも千佳ちゃんのここ、こんなに触ってほしそうに勃ってるよ。爪でカリカリされるの気持ちいいね」

「っうう♡ あ……っ♡ き、もちい……♡」

「ん、気持ちいの言えてえらいね。かわいい」

暁くんはそう言うのと、私のおでこにちゅつと唇をくつつけた。それに一瞬驚いたけど、その間も指の動きは止まらなくて、すぐに意識がクリトリスに集中してしまう。

「はっ、ん♡ ぐっ♡ あっ……う……あ、あ♡」

「千佳ちゃんかわいいよ。ふふ、どんどん濡れてきちゃうね。これ好きなの？」



「んっ♡ す、き…♡ あきらく……すきい♡」

「っ……僕も好き…」

珍しく驚いたような顔を見ると、暁くんは今度は私の唇に口付けた。気持ちよさを逃すように空いていた私の唇の向こう側から、暁くんの舌が入ってくる。それは私の舌と絡めるように口の中で動いていたから、私も答えるように暁くんの舌を絡め返した。その間もクリトリスへの刺激はずっと続いている、暁くんのやわらかい舌が苦しいのに気持ちよくて、快感以外のことがどんどんにもわからなくなっていく。

「っん……♡ はあ…っ、あ♡ あきらくん……すきっ♡ あっ……すきい

♡」

「もう……どうしてそんなかわいいの…？ 言うつもりなかったのに……我慢できなくなるよ」

「あっ♡ んう……、ああ♡」

「シヨーツもぐしよぐしよ……。これもう意味ないから取っちゃおうね」

暁くんがクリトリスを触っているのとは反対の手で私の頭を優しく撫でると、するつとショーツを脱がした。ぬるりとした感触がして見てみると、おまんこことショーツの間に糸が引いていた。

「すごいね、千佳ちゃん。糸引いてるよ。そんなに気持ちよかった？」

「あ♡ きもちい……気持ちいい、よお……♡」

「そう？　じゃあもつともつと気持ちよくなろうね」

「えっ………あ、ああっ♡」

暁くんが私の横から離れたと思ったら、今度は足の間にあたたかくてやわらかい感触がした。

「あつ、ぶあ♡　だ、め……♡　はっ♡　なめっ、ちゃ、だめえ……♡」

「ん、どうして……だめなの？　千佳ちゃんのクリ、んむ……ピクピクして、すごいえっちだよ」

喋りながら暁くんの舌がクリトリスを舐める。指とはまた違う、あたたかくてやわらかくて、でも少しざらざらした舌の感触に、身を振って快感を逃さないとおかしくなってしまうそうだった。

「や、やあ……♡ も、……あ♡ だ、だめえ……♡♡♡♡ あっ、き、きもち……よくっ……なっちゃ、う、からあ……♡♡♡♡♡」

「ふふ……かわいい、千佳ちゃん。は……ん……もっと……ん……ひもちよくな……って……?」

やわらかい舌で撫でるようにれろれろ♡ と舐めたと思うと、今度はさきっぱを固くして、ちろちろ♡ と弾くようにクリトリスを刺激する。

「ひっ♡ ああっ……だ、だめ……んっ……それ、だめ……さきっぱ……あ♡♡♡♡♡ ちろちろす、の……っ……は、♡ だ、めえ……んう……あ……♡♡♡♡♡」

「んむ……すごいっぱい……千佳ちゃんの、えっちなお汁で……ここ……ん、とろとろだね……」

れろれろれろ♡ ぢゆるるるる……♡

「あ、あっ♡ は、はず……かし……っ♡ ぐっ♡ あ♡ だめっ♡ すっ  
ちゃ、だめ……っ♡ ああ♡♡」

「ふふ……ちろちろも、ん……吸うのも……だめだめって……千佳ちゃん……きもちよく……なっひゃうもんね……ん……」

「ひっ、んあっ♡　　♡♡♡♡♡」

舌で突起を押し潰したり吸ったり、先を固くした舌で弾くように舐めたり、いろいろな刺激でクリトリスを責め立てられてぱちぱちと頭に火花が散っているような感覚になる。

「んっ、あ、だめ♡　あ、あっ♡」

「千佳ちゃん……気持ちよくて、ん……いやいやしちゃうね……ほんとかわい……ふふ、ここ……ひもちいとこ……いっぱいなめなめしてあげるね……？」  
くちゅくちゅくちゅ♡

ちろちろ♡　ぢゅるるるるっ♡

「はっ、あっ……!?　ん、ううっ♡　だ、め……またイっちゃ……、あっ♡  
だめっ、イっちゃ……あっ……♡♡♡♡!!」

先ほどよりも大きく腰が跳ねて、またイってしまう。快感の余韻に浸るように、脛がうっつりと落ちていく中で、暁くんの声が意識の遠くから聞こえた。

「千佳ちゃんいっぱいイけてえらかったね、だいすきだよ……」